

愛でなく

小林 和之

イエスこれらの言を語りへ給へるとき、群衆その教に驚きたり。
それは学者らの如くならず、権威ある者のごとく教へ給へる故なり。^{〔1〕}

あなたはもう「未来は値するか」^{〔2〕}（以下、未来論文）をお読みだろうか。本稿は、未来論文の解説を行おうとするものだ。なぜ解説を、という疑問はもつともだ。原則として論文はそれだけで完結しているべきだし、批判や要望に応えるなら、新たな論文を書くのが本筋だろう。敢えて解説を書こうとするのは、未来論文の筆者（すなわちわたし）だが、これ以後は「彼」と呼ぶことにする。自らを対象化し、未来論文の意図を客観的に見つめ直すために）が筆を折る可能性が高いからだ。少なくとも、彼が著作を公表できる確実な機会は本稿が最後である。公表前の原稿にもらった感想から、彼は未来論文がそれなりの読者を獲得するのではないかと考えている。そしてまた、読者の疑問・批判に答えることは筆者の義務であるとも考えている。本稿の役割は、主として未来論文を既に読んだ人を対象として、論文の中に収まらなかったことについて説明し、また読者が抱きそうな疑問、陥りがちな誤りについてあらかじめ解説しておくことで、読者に対する責任を果たすことである。

だから、もしまだお読みでないなら、お願いがある。本稿を読む前に未来論文をお読みいただけないだろうか。

論 説

未来論文の筆者は、わくわくどきどきしながら自分の論文が読んでもらえることを願っている。彼にとって、論文を書くことは内的な発見と探求の旅であり、読者とその過程を共有したいと考えているのだ。そのためには、行く先が見えない方がいい。本稿においては、推理小説の紹介で犯人を教えるような馬鹿なまねはできるだけしないつもりだが、それでもある程度の内容は示さざるをえないだろう。

彼は、自分の論文についてもつともふさわしい紹介の仕方はこんなふうだと考えている。「まあ、だまされたと思って読んでみてよ。ちょっとへんで面白いから」

未来論文は、あなたを怒らせるかもしれない。未来論文は、あなたを呆れさせるかもしれない。未来論文は、あなたに非常に不愉快な事実を突きつけるかもしれない。しかし、未来論文は決してあなたを退屈させることはないだろう。

これでもまだ未来論文を読もうという気にならない方のために、いくつか知的好奇心を刺激しそうな要素を指摘しておこう。未来論文は次のようなことについて論じている。

人類の滅亡は、それ自体としては恐れる必要はない

環境問題は、いかに地球を賢く使い捨てるかの問題と言える

重要なのは抽象的な人類ではなく具体的な人間である

将来世代の権利を認めることが非人道的な結果につながる可能性がある

高齢化は必然ではなく政策的選択の問題である

それでは、未来論文を読んでいただけれることを期待して、しかし前提はせずに、次へ進むことにしよう。

環境倫理については、すでに非常に多くの論文がある。その様子は夜空に燦然と数多くの一等星が輝いている姿にたとえられるかもしれない。そしていま未来論文が上梓されたとき、わたしは夜が明けたことを知った。従来の論文の主張が一等星なら、未来論文の拠って立つところは太陽であると言えよう。

誇張だと思っただろうか。まあ、もう少し話を聞いてほしい。太陽は、ごく平凡なG型恒星である。実は一等星はすべて太陽よりはるかに明るいのだ。たとえば、獅子座の主星レグルスの実光度は太陽の百倍以上である。太陽が明るく見えるのは、われわれにとって一番近い恒星であるという偶然の理由からにすぎない。これらのことは未来論文の性格をよく物語っている。未来論文ははるか彼方で輝く一等星ではない。未来論文の出発点は、われわれがたまたま人間であるという偶然の事実で、その主張することは平凡で、身近で、暖かなことである。

未来論文は深遠な哲理を語らない。高邁な理想を掲げない。いと高き理想を掲げてその正しさを主張し、人を導こうとするアプローチを、彼は伝道者のアプローチと呼んで、その有効性に疑問を呈している。「DNAメタネットワーク」、「リプロダクティブ・ヘルス」「将来世代の権利」……等々。環境問題を前に、「近代」的価値に反対し、新たな価値観を主張すること自体に彼は反対ではない。それどころか、彼自身もそれらの主張の一部には共感するところがある。しかし、ダイエツトすらままならない現代人が、新たな価値の信奉者となるだろうか。その新たな価値が、「地球に優しい」というような空疎な言葉を弄するだけでなく、欲望の制限を要求するときに。素朴に反省して生活を改めようとしても、自分のできることがあまりに小さいことを意識せざるを得ないときに。

未来論文の前提は、「人間原理」である。これは、積極的な意味では世界的に認められているといっている。国際

論 説

人権規約や各国憲法においては、ほとんど例外なく「個人の尊重」が謳われている。これは、証明できない前提である。ところが、環境危機はその前提を揺るがしかねない重大性を持って現れつつある。個人の自由な欲求満足追求を認める限り、その制約に明確な根拠を要求する限り、環境危機の進行を押しとどめることはほとんど不可能に思える。事実是不確定であり、価値観は多様だからだ。

南北問題は、さらに重苦しい影を投げかける。現在、予防できる病気で死んでいく子どもたちの数は、一年間に約一二〇〇万人にのぼる。⁽⁴⁾ 一分あたり二十数名である。あなたがこの論文を読んでいる間に、何人の命が失われることだろう。UNICEFは、これを「世界の怠慢」と呼ぶ。救える命を救っていないからだ。もちろん、問題は子どもだけに限らない。現在、世界で栄養不足人口は五億七億人、うち飢饉、慢性的飢餓状態の人口は約四五〇〇万人あまりと推定されている。これも実は解決可能な問題である。現時点において必要なだけの食料を生産することは可能なのだ。そのために新たな耕地の開拓や品種改良による収量増加は必要ない。先進国の生産調整をやめるだけでよいのだ。⁽⁵⁾

しかし、もしそうしたとしたら、こんどは分配の問題に直面する。無限の成長が信じられた時代なら、彼らを救えと叫ぶことは比較的やすかった。彼らの生命への要求が切実であることは、誰にでも理解できる。そして、自らの分け前を減らすという痛みを伴わずに、パイを大きくすることで彼らへの分配を増やすことを期待することができた。それが今ではパイの大きさの限界が感じられるようになってきている。それだけではない。仮にパイを大きくすることができたとしても、彼らを救うのが良いことだと単純に主張することはもう難しい。資源の限界よりも、環境負荷の限界が先になると予想されるようになってきたからである。ある推定によれば、化石燃料の問題に限定しても、環境基準を達成するためには日本の場合一九九二年の消費量の三〇パーセント程度に押さえる必要が

ある。⁽⁶⁾ 日本だけを考えていても、はたして達成可能かが疑問になる数字だ。彼らの生命を救うことは環境負荷の増大につながる。そして、有限の地球で無限の欲求を支え続けることは不可能なのだ。このような状態を、「救命ボートの比喩」で考える者もいる。⁽⁷⁾ 地球の現状は、定員一杯に近い救命艇に、さらに多くの人が乗り込もうとしているような状態であるとして描かれる。そして、すでに救命艇に乗っている者（先進国）は、共倒れを避けるために乗り込もうとする者（途上国）を排除することが正当化されると考えるのだ。

二一世紀は人間の尊厳と存続が矛盾する世紀となるのだろうか。

人間原理は尊重すべき前提である。これを捨てて地球に人間の居場所はない。人間は生態系にとって阻害要因ではない。邪魔な人間を阻害要因として殺し尽くすことが可能なら、環境危機は回避されるだろう。しかし人間を尊重しないという前提を人間が受け入れることを期待できるだろうか。

そして人間原理は制約でもある。人間の能力にも利他心にも限りがある。すべてを捨てて他者のために尽くすことができれば、環境危機は回避される。しかし、そのような献身をすべての人間に期待できるだろうか。

人間原理の制約は、事実の不確定性と相まってさらに厳しいものとなる。環境危機の深刻さは、それを研究する者の焦燥をかき立てる。もはや飛び上がって走り出さなければならないような状況「かもしれない」のに、そのことを知る者は少ない。

「かもしれない」。環境危機への対応のコストが大きいつき、人は大丈夫かもしれないという不確定性の陰に逃げ込んでしまいたくなる。絶対に必要な我慢はなんとかし得るとしても、せずにすむかもしれない我慢、しかも自分が生きている間には効果が現れないような我慢。これをなし得ると考えるのはいささか人間に期待しすぎているのではないだろうか。さらに価値の多元性の問題がある。仮に危険性の程度が確定したとしても、それにどれだけ

くなく愛

説論

のコストをどのようなかたちでかけるについては、さまざまな考え方があり得る。

そして、人間原理は共感の原理でもある。人間は人間にとって特別な存在であり、人間は人間に対してなにかの思いを抱く。「ひとごと」は、自分が扱うべき問題でないとしても、直接関わりのない人間のことであったとしても、関心の対象となる。そして人は他者の幸福よりも不幸に、喜びよりも悲しみに敏感に反応する。人は他者の感情的コストを自らのコストとしうる。

弱肉強食は自然界の掟だ。われわれはそうして生きてきたではないか。邪魔者は殺せ、これを優しい悪魔の囁きと呼ぼう。弱い者へのいたわりこそ人の道である。われわれはこれまで、人間の尊厳を求めて戦ってきたのではないか。すべてを尽くして他者のために生きよ、これを残酷な天使のテーゼと呼ぼう。優しい悪魔の囁きと、残酷な天使のテーゼとの間で、人間の従うべきルールは何か。未来論文は、事実の不確定性と価値の多元性を超えてこの問いに答えようとする試みである。

未来論文は、価値の問題を処理するに当たって次のようなことを前提としている。

ある価値を尊重するということは、社会的には、その価値の担い手である人間とその行動を尊重することである。マクロ的な処理は便宜的な必要から認められる。その場合、マクロ的な処理の評価は、最終的に担い手である個人に還元して評価されなければならない。

マクロ的な処理において、重要なのは利得の最大化と分配ではなくコストの最小化と分配である。悲惨と苦痛は他の価値の享受を妨げるといって、他の価値と同列に扱うことは適切ではないからだ。価値の享受には、生活の

質が一定の閾値を超えている必要があり、少数者にその閾値を下回らせるような政策が、全体としての利得を最大化するとしても、その政策を正当化することはできない。これは人間原理からの派生的に導かれる。

担い手のいない価値は無視してよい。地球上の誰一人として支持しないような価値が価値として存在するということは純粹思弁において考えられるが、社会理論の構築には(別の価値観を対比において浮き彫りにする)ような便宜的な役割を果たすのでない限り)意味がない。

相互に矛盾する価値体系の担い手が併存している場合、すべての担い手を満足させることは不可能である。

価値体系間の優劣は理論的に決定できない。その意味で価値相対主義は正しい。

社会においては、無制約の価値相対主義で物事を処理することができない。水道に毒物を混入することを重要な価値であると考ええるような価値観、他人を傷つけるような形でしか実現できないような価値観の実現に対しては制約を加えざるを得ない。

秩序はそれ自体、価値である。また、他の多くの価値を享受する前提であるという意味でメタ価値として位置づけられる。これを実現しているルールの体系(法体系)がある場合、それを一応尊重することが各人の価値の保護に役立つ。この意味で、通常は現行法秩序に従う意味がある。従って歴史的に評価がなされている人権規約や憲法に従うことは正当化できる。ただし、重要なのはあくまでひとりひとりの人間であるから、状況に応じて各人の価値をよりよく尊重できるように再調整される必要がある。

未来論文は、このような条件と前提において、ある先入観を捨てることによって環境問題を処理するシステムを設計した。それは、「人類滅亡は絶対に回避しなければならない」という先入観である。未来論文は、まず人類滅亡

論 説

の選択が個人の選好満足を最大化する場合があることを示した。そしてその上で人類の存続と滅亡の決定について個人の自由な選択を保障することによって、価値の多元性と事実の不確定性の問題を各人の判断に委ねた。すなわち、未来論文は、環境問題という極限にマクロの問題を個人の選択というミクロの問題に還元して処理して見せたのである。このあたりの手並みはぜひ現物に当たって鑑賞してほしい。彼はその選択を可能にするシステムに「逆しまの箱船」という名を与えた。

なお、未来論文に限らず、彼の論文においては個人の選択を尊重する合理的なシステムの設計が試みられている。そのことから、「人間は合理的ではない」という批判を受けることがある。彼が、合理的な人間を前提にしているというのは、全くの誤解である。彼はそもそも人間の行動が合理的でなければならぬとはまったく考えていない。それどころか、他人から見ても不合理な行動の中にこそ本人にとって切実な要求が潜んでいる場合があることを認め、それを尊重することが必要であると考えている。重要なのは、各人の選択を制限することではなく、その自由を保障して結果に責任を割り当てることなのである。彼が合理性を要求するのは、国家制度のような個人に強制されるものに対してである。個人の自由の制限は、少なくとも合理的なものでなければならぬというのはきわめて穏当な主張であろう。その際、個人の行動が合理的かどうかは必ずしも問題にならない。それどころか、個人が不合理で不注意であればあるほど、個人が利用するシステム(強制されない場合も含む)は合理的でなければならぬと彼は考える。自動車の設計の場合を考えてみるといい。人間が不合理で不注意であることは、ブレーキをかける速度が上がったり、右にハンドルを切るときどき左に曲がってしまうような車の設計を正当化するものではない。安全を確保するためには、不合理で不注意な人間をアシストすべく合理的に自動車を設計する必要があるのだ。

「逆しまの箱船」の全文は未来論文の中ではまだ語られていない。世界が主権国家に分断されていることは、環

境問題の解決を困難にしているが、「逆しまの箱船」は国境を越えて作用するシステムとして設計されている。開発途上国が自発的にシステムに参加する誘因が組み込まれているからだ。環境問題においては、開発途上国においては民主化が不徹底であり、ひとりひとりの人間の暮らしが保障されていないことが環境の悪化に拍車をかけていることが指摘される。「逆しまの箱船」は、南北間格差だけでなく、開発途上国の内部での貧富の差を縮小することも考慮している。これらについては萌芽的にしか語られていないが、具眼の士には読みとることができよう。⁹

愛は地球を救う、とは某テレビ局のスローガンだ。「地球を救う」が見当違いな言いぐさであることはあえて言うまでもないだろう。では、愛はひとびとを救えるだろうか。

無理だろう。彼はそう見ている。愛のような強すぎる感情は、巨大な社会を組織する原理としては不適切である。愛は遠くまで届かない。見知らぬ人を、地球の裏側にいる人を愛せる者はいない。だが、なにがしかの思いを致すことは不可能ではあるまい。これまで一度も会ったことがなく会う可能性もない人のことであっても、人間の不幸は、他の人間の感情を呼び起こす。

物理学において知られている力は四種類ある。その中でもっとも弱い力が重力であるが、もっとも遠くまで届く力もまた重力である。星々を結びつけ、宇宙の構造を決定しているのは重力である。他のもっと強い力は、遠くまで届かないのだ。

では、このなにかの思いはひとびとを救えるのだろうか。彼には分からない。おそらく誰にも。なにがしかの思いはやはりなにかがしてしかなく、それを過大に見積もることができないことを彼はよく承知している。しかし、いかに頼りないものであれ、われわれの手にあるものはこれだけであり、そして同時に、この力はいまだ限界まで試されたことがないと彼は感じている。われわれの思いはどこまで届くのだろうか。われわれの未来はすでに分か

ちがたく結びついている。先進国の未来は、途上国の行動によって大きく左右される。逆もそうだ。それなのに、途上国の問題は遠くのことと感じられる。われわれはいま、共感と想像力の限界に直面しているのかもしれない。

彼が確信していることは、たった一つ。われわれにはもう少しましなことができる、ということだ。われわれの思いがどこまで届くかは分からないにせよ、もう少し遠くまで響かせることができるはずだ。彼が行おうとしたのは、思いが遠くまで響くための空間設計である。もっと強く思えども、同じように思えども彼は要求しない。思いがよく響くように空間を設計すれば、響き合うこと自体の心地よさによってさまざまな思いがハーモニーへと収斂していくことを彼は期待していた。⁹ それだけではない。「逆しまの箱船」は時間設計でもあった。「逆しまの箱船」自体は価値中立的に設計されているが、自然淘汰 (natural selection) ではなく人為選択 (human selection) によってヒトを倫理的に進化させる装置としても機能して、ハーモニーを乱すノイズを低減することが予定されていた。¹⁰

うまくいくだろうか。われわれに十分な時間は残されているのだろうか。

おそらくだめだろう。彼はそれも見越していた。「逆しまの箱船」は失敗を予感した命名である。逆さの船が往くはずもない。情報の不確実性によって、コストの分配は適切に行われず、問題を解決することは結局できないだろう。それでもこのシステムは無意味ではない。ついには死ぬ運命にある人の生が無意味でないように。負け戦にこそ戦い方がある。それゆえに、未来論文のサブタイトルは「滅亡へのストラテジー」とされた。¹¹

そして、滅亡を前提としてシステムを組上げることこそ、未来を手に入れる可能性がある。¹¹ ひとびとの意識と価値観を変えるのはお説教ではなくシステムであろう。滅亡をしっかりと見据えることで、単なるコストの分配を超えてひとびとは変わることができるかもしれない。人為選択による品種改良を超えた突然変異が生じるかもしれ

ない。それこそ彼が見いだした唯一の可能性である。はたして死中に活は見いだせるのだろうか。

いまはただ、彼とともに筆を擱くことにしよう。すべてのひとびとのために未来が値することを願って。

- (1) マタイ傳第七章より
- (2) 小林和之「未来は値するか——滅亡へのストラテジー」(井上達夫・嶋津格・松浦好治編『法の臨界』第三巻、一九九九)
- (3) レグルスは三重連星だが、ここで取り上げているのはもっとも明るいレグルスAである。
- (4) <http://www.unicef.or.jp/tof/to.html>, <http://www.unicef.org/status/> 参照。
- (5) 田中直「適正技術・代替社会」一九五頁(井上俊他編『環境と生態系の社会学』岩波書店(一九九六)所載)
- (6) これらについては、荏開津典生「飢餓」と「飽食」食料問題の十二章(講談社、一九九四)一一一―一二七頁。
- (7) Garret Hardin, Exploring New Ethics for Survival, 1972 カレット・ハーティン著、松井卷之助訳「地球に生きる倫理：宇宙船ビーグル号の旅から」佑学社(一九七五)所載、Living on A Lifeboat「救命艇上に生きる」。この問題を取り上げているものとして、小林直樹「人口問題の法哲学(四)——個人・国家・人類公共性の問題——」(法律時報 六六巻 一号一九頁)
- (8) 現在地球温暖化が懸念され、二酸化炭素の排出規制が問題になっているが、地球は寒冷化すると考えている科学者もいる。丸山茂徳「本当は「寒冷化」なのに／「愛」が人口を増やし自己崩壊へ」(サイアス通巻五一号、朝日新聞社、一九九九)もしそれが正しければ二酸化炭素の積極的排出こそ望ましい選択だということになる。
- (9) 彼は、彼の理論を象徴的に表現する夢を見た。彼の理論のイメージをつかむのに有益であると思われるので、次に記すことにする。

セクション——ハーモニーは専制する

俺は、小汚い格好で、無精ひげを生やして、肩を落として、なぜだか目は輝かせながら街を歩いていた。

存在感のない人影が笑いながら俺の傍らを通り過ぎていく。

俺にギターを押しつけてくるやつがいた。なんだってんだ。俺はもうギターを最後に手にしてから何年も経つてのに。

突然、あたりは不協和音で満たされた。いつの間にか、俺の周りにはたくさん奴らがいて、思い思いに楽器を歌わせていた。

あれ、あいつはトランペッターのMじゃないか。あいつ、もう死んでるんじゃないか。他にもなんか顔を知っているやつがいる。ほとんどはジャズだ。でも、どうして。俺はジャズはほとんど聴かないのに。演奏を通して、俺は奴らのことがよく分かった。みんなろくでなしだ。自分をスゴイと思っていて、他人を見下して、ろくでもないことばかり考えている。気にくわないのを殺そうと思ってる奴。レイブの機会をうかがってる奴。手当たり次第、自分も他人も傷つけてしまう奴。ただ、どいつもこいつも自分の演奏にはプライドを持っていた。そいつがまた事態を悪くしてた。

そして、奇跡が起こった。掛け値なしの奇跡だ。ハーモニーが生まれたんだ。思い思いの自分勝手な演奏の中で。

そのとき、俺の手が動き出した。俺はギターを弾いた。俺にできるはずもない正確さで。俺に出せるはずがない美しい音色で。

誰も逆らえなかった。周りにいるクズどもは、音楽に対してだけは敬虔だった。誰にも従わない奴らも、このハーモニーに抗うことはできなかった。

俺のメロディーがすべてを支配した。俺の？ 分からない。俺は何かを決めていたか？ 全力疾走する巨獣にどれだけ選択の余地がある？ 冷徹な必然性の中で、俺たちは、ある限りの力をもっとも美しいかたちで解放し続けた。姿を変える巨獣は大地を駆け回った。大地をたたく蹄のビートが背骨を貫いたが、それはどうでもよかった。姿を変える巨獣は深海にダイブした。青黒い闇の中で無数の泡が鱗に沿って幾何模様を描いたが、それはどうでもよかった。姿を変える巨獣は天空に羽ばたいた。真昼に星々がきらめく高みで、吐息はたちまち結晶と輝いて舞い落ちていったが、それはどうでもよかった。

俺たちはただ全力で自分のしたいことをしていた。俺たちは巨獣のなくてはならない一部だった。それぞれ全然違う自分の出したい音色を奏でることがその肉体の躍動だった。全速で時空を突き抜ける巨獣に目的地はなかった。どこへでも行けたが、どこへも行かなくてよかった。俺たちは楽しんでた。陶酔じゃない。感覚はどこまでも研ぎ澄まされていた。俺たちはできる限り自分らしくしていることがハーモニを響かせることであることに驚いて、そのことに全神経を集中していた。そして、はっきりと分かった。俺たちが一番自分らしくなれるのはどこでなのか。この巨獣が誤って何と呼ばれてきたか。

終わりは唐突だった。来たときと同じくらい突然に、それは去っていった。一瞬の真空状態。そして奴らに囲まれて俺はもみくちゃにされた。叫ぶ奴。泣く奴。地団駄踏む奴。俺をどやしつける奴。

なぜ始まったのか、なぜ終わったのか。
俺には分からない。

でも、俺たちは最高だった。俺たちは最高だったんだ。

気がつくとな俺は一人だった。そうか、肉体を持っていたのは俺だけだったのか。でもあいつら、いったい何をしに来たんだ？ よりによって、どうして俺のところに来たんだ。

そして俺は、「報い」を手にしたことを知った。俺は報われたかったのか？ そんなつもりはないはずだったのに。

地上にて天国を目にしたる者は。

彼の理論の目的は、このセッションのように各人がそれぞれ自分のしたいことをすることによって秩序が作られることである。そのために、彼の理論自体が秩序を作り出すのではなく、秩序が作られやすい条件を整え、いったん作られてからはその調和自体の心地よさによって調和が維持されることが期待されている。もともと、それはあくまで

理想であり、おそらくは、セッションを分割することによって部分的な秩序を動的に形成していくことができればよしとしなければならぬだろう。最低限として期待されるのは、ひどい不協和音は、それ自体の不愉快さによって抑制されるということだ。

この巨獣は彼にとって麒麟^{*}だったのかもしれない。とすれば、これはまさに獲麟^{*}の夢である。そして獲麟は鶴林^{*}に通じる。この夢が見られたのが、古代の成道会の二日前にほど近い日だったことはいささか運命的であった。なお、sessionから¹を抜けば世尊になる。

* 中国で聖人の出る前に現れると称する想像上の動物。形は鹿に似て大きく、尾は牛に、蹄は馬に似、背毛は五彩で毛は黄色。頭上に肉に包まれた角がある。生草を踏まず生物を食わないという。一角獣。

* (孔子が「春秋」を著し、「西狩獲麟」の句を以て筆を絶って死んだことに基づく。麟は麒麟)(1)絶筆。物事の終末。(2)誤用されて、孔子の死をいい、更に転じて、臨終、または臨終の辞世の意となった。

* (釈尊の入滅を悲しみ、沙羅双樹(サラソウジュ)が鶴の羽のように白く変って枯死したという伝説に基づく)沙羅双樹林の異称。転じて、釈尊の死、すなわち仏涅槃(フツネハン)。

* (じょうどうそ)二月八日(わが国古代には三月一日)、釈尊成道の日として行う法会。臘八会(ロウハチエ)。

* (梵語 Bhagavat 福德ある者、聖なる者の意) 仏の尊称。特に、釈迦牟尼の尊称。仏十号の一。

以上すべて広辞苑第四版電子ブック版による。基礎法専攻者を対象としてさえ、この程度のことには註が必要であると思わざるをえないところに「教養の死」を感じる。

(10) 未来論文は、二一世紀がひとびとの未来を方向付ける世紀であると位置づけた上で、数百年のスケールで問題を処理することが構想していた。

(11) これが未来論文のエピグラフの一つの意味である。

原典にない付記

小林和之はその後、再び筆を執った。